鈴木貫太郎と東条英機
——大日本帝国軍人たちの政治哲学——

石　井　貫太郎

目　次

1．はじめに
2．鈴木貫太郎の生涯
(1)　帝国軍人としての貫太郎
(2)　帝国宰相としての貫太郎
3．東条英機の生涯
(1)　帝国軍人としての東条
(2)　帝国宰相としての東条
4．おわりに——軍人政治家たちの評価
(1)　鈴木貫太郎の評価
(2)　東条英機の評価

1．はじめに

(1)　鈴木貫太郎と東条英機

先の太平洋戦争時に、日本は2人の非凡な軍人宰相を輩出している。鈴木貫太郎と東条英機である。[1] 一般に国家が戦争という非常事態になると、戦争を遂行する専門家としての軍人が政治に介入し、政治家としても活躍する事例は多い。というよりも、カエサルのような古代ローマ帝国の皇帝たちを引き合いに出すまでもなく、昔は政治家がそのまま軍人であった事例は数多い。また、近代や現代においても、トルコのケマル・パシャ、アルゼンチンのペロン、ドイツのヒトラー、スペインのフランコ、フランスのシャルル・ド・ゴール、そして日本の戦国大名や明治の元勲たちなど、世界史上における軍人出身の巨人政治家たちは枚挙に暇がない。もちろん、第二次世界大戦後こうした傾向は沈静化していったが、それでもなお、韓国のパク・チョンヒ、インドネシアのスハルト、リビアのカダフィ、イラクのフセインなど、特に途上国におけるこうした事例は後を絶たない。本稿では、今日の我が国では法制上不可能となったこうした軍人政治家の事例を戦前の事例に求め、その代表的な人物としての鈴木貫太郎と東条英機を取り上げて比較考察し、日本における軍人政治家の政治哲学について検討したいと思う。

いしいかんたろう：人文学部地域文化学科　助教授

ところで、鈴木貫太郎という名前を聞いてすぐに本人のことを思い浮かべることができる日本人は、もはや少なくなっているであろう。かつては人の名前で「かんたろう」といえば、それはすぐさま鈴木貫太郎の「貫太郎」のことであり、「勘太郎」や「寛太郎」ではなかった。かく申す筆者自身もまた、この首相と同時代に陸軍の青年兵士としての経験を経た父からこの名前を命名され、以来、軍人と政治家の最高位を極めたこの日本が生んだ偉人の名前を汚さぬように必死で務めてきた人間の一人である。もちろん、残念なことに、現代のほとんどの日本人はこの偉大な政治家の名前すら知らない。しかしながら、もし20世紀に輩出した英雄的な政治家列伝の日本版を作るとすれば、迷うことなく三本の指に入るであろう業績を遺した人物こそ、この鈴木貫太郎その人なのである。[2)]

鈴木貫太郎首相は、もともとは海軍大将、連合艦隊司令長官としての身をもって、ヨーロッパの列強をして「極東の憲兵」と称されていく軍国日本の礎の一人として活躍した生粋の軍人であった。すなわち、明治維新以来、日清・日露の両戦争、第一次世界大戦を経て、国際連盟の常任理事国として世界の一等国となっていく大日本帝国の輝かしい歴史と歩を一にして、その軍人としての人生を歩んだ生粋の日本男児であったといえる。いわゆる好戦主義の社会風潮が深化していく途上において、日本の軍備縮小を強いられたロンドン軍縮条約に反対する軍令部との確執といったいきさつから不本意にも「君側の奸」と目されるようになり、2・26事件で青年将校の凶弾に倒れるという悲劇に見舞われながらも、その一命をとりとめている。

その後、日本が東洋最強の国家として西洋最強のアメリカと雌雄を決した太平洋戦争に敗北していく過程において、枢密院議長、内閣総理大臣として、昭和天皇とともに敗戦の最後の幕引きをおこなう政治家となっていく。いわゆる老獪（ろうかい）と称される政治手腕をもって、古巣の海軍軍部や行政官僚キャリアたちを抱きこみつつ、特に陸軍からの強硬な反対を巧妙にかわして終戦工作を展開し、軍人でありながら祖国に平和を回復した稀有な人物である。[3)]

一方の東条英機は、陸軍軍人としての階位を極めた人物である。鈴木貫太郎への評価と対照的に、東条には常に悪役的な評価がつきまとう。[4)] しかし、近年になってこうしたアングロ・サクソン的な見解には多くの異論や批判が提示されるようになってきた。そこでは、東条が自己の歴史における役割から逃げない勇気を持ち、平素からの勤勉と真面目さを誰よりも評価されていた好人物であった事実が指摘され、そのような人間をこともあろうにヒトラーやポルポトと並べて「悪役政治家」呼ばわりするとはなにごとか、という怒りや憤激にも似た論議が展開されている。[5)] 特に、名優・津川雅彦氏の熱演でヒット作となった東条首相と極東国際軍事裁判の様子を描いた映画『プライド』が上映されて以来、日本国内でも東条首相の功績を再評価する世論が強い。しかし、東条首相は、東洋最強の国家と軍隊の頂点に立つ人物でありながら、残念ながら、その祖国に敗戦の悲哀を受けさせた最大の責任者の一人であったことは事実である。そして日本の近代および現代の歴史を通じた最大の悲劇的な事件が太平洋戦争であり、また、対米戦争の敗北であったならば、やはり東条首相は、その渦中に国家の舵取りをするという悪役的な歴史上の役割を遂行した政治家たちの中でも、その代表格の一人として選出されてしまうことになるであろう。

ちなみに、東条首相は、あくまでも政治家ではなく軍人であった人物である。そして、同時代の軍人の中でも、とりわけ官僚・公僕としての有能な資質をもった人物であった。しかし、日本および本人にとっては、そのような人物が一国の頂点に立つことがむしろ逆に命取りに繋がっていった。そこには、組織人としての出世街道を最高度にまで上り詰め、軍隊という官僚組織の中で位階人身を極めていく能力と政治家に求められる資質との異質性やギャップというものが関係している。換言すれば、組織人として発揮する官僚的な能力の論理と政治家として求められる能力の論理とは、決定的に異なるものなのである。　時に歴史は、シャルル・ド・ゴールや鈴木貫太郎のように、その時代、その場所に求められる適正な人材をあてがう場合もあれば、また、逆に東条首相の場合のように、その時空に適合する資質とは異なる才能を持つ人物を配置したりする場合がある。ここに、世界と、日本と、そして東条英機という人物の悲劇の温床があった。ここでは、不幸にも運命の流転によって「悪役」となってしまったこの悲劇の宰相の足跡をたどりたいと思う。

なお、事実関係の記述については、鈴木・東条の両者とも三省堂編修所編『コンサイス日本人名事典（第４版）』（三省堂、2001年）によった。

２．鈴木貫太郎の生涯

(1)　帝国軍人としての貫太郎

鈴木貫太郎首相は、明治、大正、昭和の近代日本を代表する海軍軍人（大将）であり、政治家である。彼は、1868年１月18日（慶應３年12月24日）に和泉国（今の大阪府）久世村の代官、鈴木為輔（後に由哲に改名）の長男として、その和泉の陣屋の中で生まれた。その後、群馬中学、近藤塾を経て、海軍兵学校に第14期生として入校する。後に「水雷の鬼貫」と呼ばれ、海軍大将、侍従長、枢密院議長、首相を歴任する鈴木の海軍軍人・政治家としての生涯は、これより始まったわけである。

さて、鈴木首相は、兵学校卒業後、少尉候補生として練習艦「筑波」に乗艦し、遠洋航海を経験した後、少尉に任官された。1894年に日清戦争が勃発すると、これに水雷艇長として参加している。1897年、鈴木首相が30歳の時に大沼とよと結婚した。また、同年、海軍大学校にも入校し、翌1898年、同校を卒業の後も引き続き「甲種学生（特に成績が優秀な学生の称号）」を命ぜられて軍略と学問の陶冶に勤しんだ。さらに、この甲種学生を卒業後、海軍大学校教官および陸軍大学校教官を、また、皇族・貴族の子弟を指導する学習院大学の教授をも兼務している。いかに優秀な人物であったとはいえ、三つの大学教授を兼任させられてはその忙しさはたまったものではなかったことであろう。かつて筆者も本務校の他に三つの大学の非常勤講師を掛け持ちしたことがあるが、いうまでもなく２年ほどで身体を壊した経験がある。1901年にやっとドイツ駐在武官を命ぜられることで、その多忙な生活から解放されている。

さて、1904年に日露戦争が勃発すると、開戦後は軍艦春日の副長（中佐）として勤務した。その後、第５駆逐隊司令を経て、日本海海戦時には第４駆逐隊司令へと転任し、この歴史的な海戦に参

加する名誉を得る。また、日露戦争終結後の1905年には、鈴木首相は再び海軍大学校の教官となり、翌年には海軍教育本部員をも兼任することになる。さらに、1907年には大佐へ昇進し、翌年には巡洋艦「明石」の艦長を命ぜられている。また、1909年には新たに練習艦「宗谷」の艦長も命ぜられる。ちなみにこの練習艦は、江田島の海軍兵学校を卒業したばかりの少尉候補生を乗せて遠洋航海に出ることが慣例となっていたが、当時の宗谷の乗り組み士官には後に連合艦隊司令長官を務めることになる山本五十六、古賀峯一といった強者たちが大勢おり、また、士官候補生としても、後に日本海軍の中枢をなす井上成美、草鹿任一、小澤治三郎らの海兵３７期がいたのである。いってみれば、これらの人々は皆、鈴木首相の教え子となったわけである。

さて、鈴木首相の軍歴は、その後1910年に水雷学校の校長、1911年に「敷島」の艦長、1912年には「筑波」の艦長へと転任が続いている。その間に、妻とよと死別するという悲劇に見舞われている。翌1913年、海軍少将に昇進した後、第２艦隊司令官、舞鶴水雷隊司令官、海軍省人事局長を歴任していく。この頃の鈴木首相は、いわゆる水雷戦の権威として、すでに海軍部内の地歩を築いていたと考えられる。また、鈴木が人事局長を勤める1914年には、いわゆるシーメンス事件が起きている。なお、山本権兵衛内閣が倒れた後、大隈重信内閣が組閣されると、八代六郎海軍大臣の下で鈴木首相は海軍次官を命ぜられる。この時、八代海軍大臣は、シーメンス事件の後始末として山本権兵衛、斎藤実両大将の予備役編入を決定している。また、この年の８月には日本は第１次世界大戦に参戦している。さらに同じ年、鈴木首相は迪宮裕仁親王（昭和天皇）の養育係をしていた足立たかと再婚した。

1915年に八代海軍大臣が辞めた後も、後任の加藤友三郎の下で、鈴木首相は引き続き海軍次官に留まることとなる。また、1917年には中将へ昇進したが、その直後、父・由哲が亡くなっている。また、この年、再び海軍次官に任ぜられるとともに、練習艦隊司令官をも命ぜられている。次いで、1918年には将官会議議員となる。また、同年12月には、江田島の海軍兵学校校長に任命され、その後、２年間、学校長の任をまっとうした。1920年に第２艦隊司令長官、翌年には第３艦隊司令長官、さらにその翌年には呉鎮守府司令長官をも務め、1923年には海軍大将へ昇進した。翌1924年には、ついに連合艦隊司令長官および第１艦隊司令長官を努め、海軍軍人の最高峰を極めることになった。また、同年12月、軍事参議官にもなっている。1925年には軍令部長に就任し、鈴木首相の軍歴における階位は頂点に達した。1929年、予備役に編入され、軍人出身としては初の侍従長および枢密院顧問を命ぜられる。これにより、生粋の海軍軍人であった鈴木首相は、この後、急速に政治家への道を歩むこととなっていくのである。

(2) 帝国宰相としての貫太郎

1930年、ロンドン軍縮条約が締結された。鈴木首相は条約批准に肯定的であったが、この日本封じ込めとも取れる条約を強いられた軍部内の反発は大きかった。したがって、侍従長在任中の鈴木首相は、ロンドン軍縮会議に反対する加藤軍令部長らの慰撫につとめるなど天皇側近としての姿勢を示したため、かえって逆に「君側の奸」と目されてしまう。その後、内外の情勢が不安定化する

中にあって、1936年に２・26事件が勃発し、鈴木首相も自宅で安藤輝三陸軍中尉らに襲撃され銃弾４発を受けて重傷を負うが、この時、とどめを撃とうとした安藤中尉に対して身をもって制したたか夫人の逸話は有名である。その甲斐あって何とか一命は取りとめた。そして、退院後の同年11月、８年間務めた侍従長を退任し、男爵に列せられるとともに枢密院顧問官に就任した。また、1940年には、枢密院副議長および教育審議会総裁となった。さらに1944年、枢密院議長に就任する。第２次大戦も敗色濃厚となった翌1945年４月、小磯国昭首相が退任した後、宮中勢力からその野心の無さを買われて鈴木首相に組閣の大命が下り、ついに内閣総理大臣に就任することとなる。ここで鈴木首相は、陸軍大臣には侍従長時代に知己のあった阿南惟幾大将を就任させるとともに、海軍大臣には穏健派の米内光政を留任させ、同時に、外務大臣として外務省キャリアの中で戦争推進に反対だった東郷重徳を起用して、後の終戦工作のための地固めをしていく。また、この時、鈴木首相は、大蔵省を辞職して父の秘書官となった長男の一（はじめ）氏に対して、「私は日本のバドリオ（イタリアでムッソリーニ独裁を打倒して連合国に降伏した陸軍元帥）になるだろう」と語ったと伝えられている。

鈴木首相は、大命降下の直前に陸軍省を訪れ、杉山元陸軍大臣に面会し、自己の内閣に陸軍大臣として阿南惟幾大将を就任させることを求めた。鈴木首相は、杉山元陸相からの「戦争目的の完遂、陸海軍一体の軍政、本土決戦のため陸軍の企画の実行」という三つの条件を呑むことで、この人事政策を実現させた。また、就任演説においてもあくまでも戦意の高揚を訴え、講和の意図をひた隠しに隠し続けたのである。ここで鈴木首相の基本的な施政方針は、本土決戦体制を強化して一億玉砕を呼号する一方で、最後の望みをソ連仲介和平に託して密かに画策するというものであった。しかし、周知のように、その後の対ソ交渉は決裂し、原爆投下、ソ連参戦という急迫した事態の中で、国体護持のためのポツダム宣言受諾への途を切り開くことになっていくのである。また、首相就任直後の４月12日、アメリカ大統領ルーズベルトが急死すると、鈴木首相は同盟通信社を通じて丁重な弔意を表明している。同年５月５日には、ヨーロッパでドイツが降伏し、７月末には米・英・中によりポツダム宣言が発せられた。鈴木首相はこれに対して「黙殺（ignore）」と表明し、その訳が全世界に発信された。

1945年８月９日、天皇陛下の臨席を得た最高戦争指導会議が開かれた。ここで、国体の護持は保障されるとの前提の下、ポツダム宣言の即時受諾に賛成する鈴木首相、東郷外相、米内海相と、国体の護持以外の無条件受諾に反対する阿南陸相をはじめ、軍令部総長、参謀総長とに分かれて激しい議論が交わされ、午後の閣議を経てもなお、結論には達しなかった。また、同日深夜、枢密院議長を加えて再び御前会議が召集されたが、やはり意見の一致に至らなかった。そこで鈴木首相は、明治以来の慣例を破り、いわゆる天皇陛下のご聖断を仰いでポツダム宣言の受諾を決定させた。また、閣議においても同宣言の即時受諾を決定させている。その後、日本側から、天皇大権の変更をともなわない限りにおいて宣言を受諾するという中立国を介した発信に対する連合国側からの回答が来た。そこに天皇および日本国政府の国家統治の権限に関する「subject to」の文言があったため、これを外務省は「制限の下」と訳し、これに対して軍部は「隷属」と訳し、ポツダム宣言の受

諾に対する政府内での見解が再び大きく分かれる結果となった。

そこで、8月14日の午前に御前会議が召集され、鈴木首相は心苦しくも再度の天皇陛下のご聖断を仰いだ。ここで、再びポツダム宣言の即時受諾に関するご聖断が下った。その後、鈴木首相は直ちに閣議を開き、全員一致でポツダム宣言の受諾が正式に承認させた。そして、運命の8月15日、天皇陛下自らの肉声による終戦詔勅放送後、鈴木首相は枢密院の本会議に出席して終戦の公式な手続きを完了した。また、枢密院の本会議終了後には鈴木首相は閣議を召集し、全閣僚の辞表を取りまとめて天皇に提出して、ここに終戦内閣は総辞職したのである。なお、この日、鈴木邸は暴徒により焼き討ちされている。その後、鈴木首相は再び枢密院議長、王公族審議会総裁となったが、進駐軍による占領政策下においては見るべき政治活動は行なわなかった。

1948年4月、日本国に平和を回復した海軍大将・鈴木貫太郎首相は、故郷の千葉県関宿で息を引き取った。81歳の天寿をまっとうした鈴木首相に対して、日本政府は1960年になってからようやく従一位の称号を贈った。お役所のやることというのは、いつの時代もあまり変わらないのである。

2．東条英機の生涯

(1) 帝国軍人としての東条

東条首相は、大日本帝国陸軍・昭和期の軍人であり、また政治家でもあった。彼は、1984年（明治17年）12月30日に陸軍中将であった父・英教（ひでのり）と母千歳の間の3男として、東京都青山で生まれた。いわゆる軍人家系に生まれた江戸っ子であった。生涯を通じてニックネームの多いことでも知られる首相であり、主なものをあげるだけでも、「カミナリ」、「カミソリ」、「メモ魔」などがある。また、彼自身の座右の銘は、「努力即権威」であったという。

ちなみに、英機の父・英教は陸軍軍人として高位を得た人物であり、南部藩（今の岩手県）の士族の出で西南戦争に従軍し、陸軍大学を卒業した後、ドイツ留学、参謀本部勤務、陸軍大学教官を経て、日清戦争では大本営参謀となり、日露戦争では第8旅団長として活躍している。戦争中に病気のために帰国し、留守近衛第1旅団長を務め、戦後は朝鮮京城守備旅団長となったが、やはり病気のために帰国して、ようやく軍部中枢のエリート・コースからはずれていく。以後、兵学書の著述に励んだ篤学の人でもあった。このような軍人気質の父親であったから、幼い頃から才気利発な英機に対する父の期待は、およそ尋常ではなかったことであろう。

さて、東条首相の学歴は、以下の通りである。まず、1897年（明治30年）4月に旧制城北中学へ入り、卒業の後、1899年（明治32年）9月に東京陸軍幼年学校（3期）へ入校する。これを経て、1904年（明治37年）6月に陸軍士官学校へ入学し、1905（明治38）年3月に17期として卒業している。卒業順位は、360人中10番であった。当時、日本中の秀才が立身出世を夢見て門を叩く陸士をこの成績で卒業したのだから、やはり相当な秀才であったと言わねばならないであろう。さらに、1915年（大正4年）12月には陸軍大学校を卒業する。

東条首相は、陸軍士官学校を卒業してすぐに軍人としての任務に就く。まず、1905年（明治38年）

4月に陸軍少尉に任官し、近衛歩兵第3職隊補充隊附として配属される。ここで10年ほど勤務する途中に中尉となり、さらに、1915年（大正4年）6月には大尉へ昇進し、近衛歩兵第3職隊中隊長となる。また、同年12月には陸軍大学校を卒業したので、同時に陸軍省副官にもなった。また、1919年（大正8年）にスイス駐在武官として派遣されることとなる。その翌年、1920年（大正9年）8月には少佐へ昇進した後、ドイツ駐在武官として派遣される。ちなみに、このドイツ駐在中の1921年（大正10年）にバーデンバーデンの会合にも参加している。

このようにキャリア軍人としての要素を順調に積み重ねた東条首相は、当然、ドイツから帰国後、軍部中枢のエリート・コースの道を歩んでいくことになるはずであった。しかし、その昇進や経歴の進行スピードは、決して不遇というまでには悪くはないが、やはり彼の才能から見て相応なものであったとはいえないと思われる。まず、1923年（大正12年）9月に参謀本部部員となり、同年10月には陸軍歩兵学校研究部部員となる。また、1924年（大正13年）には中佐へ昇進するも、1926年（大正15年）3月には陸軍技術本部附および陸軍省軍務局課員、同年3月には陸軍大学校兵学教官、1928年（昭和3年）3月には陸軍省整備局動員課長、同年8月に大佐へ昇進、1929年（昭和4年）8月に歩兵第1職隊長となり、1931年（昭和6年）8月に参謀本部第一課長、同年9月には兼陸軍通信学校研究部部員および陸軍自動車学校研究部部員となり、1932年（昭和7年）に参謀本部第一部統制課長、1933年（昭和8年）3月に少佐へ昇進とともに参謀本部附被仰付となり、同年8月に陸軍兵器本部付、同年11月に陸軍省軍事調査部長、1934年（昭和9年）3月には陸軍士官学校幹事、同年8月に歩兵第24旅団長、1935年（昭和10年）8月に第12師団司令部附被仰付となる。このように、東条首相の軍歴の前半は何となくごく平凡なものであり、どちらかといえば調査・研究・教育というような仕事が多く、本来のキャリア軍人としての華々しさに欠けるきらいがある。その理由は、やはり東条首相自身がいわゆる統制派の中心的な人物と目され、皇道派全盛の時代は不遇であった事実がうかがえるのである。

しかし、1935年の後半あたりからようやく陽の目をみるようになり、9月に関東軍憲兵司令官および関東軍警務部長に就任した頃から、後年の頭角を表すようになってくるのである。次いで1936年（昭和11年）12月に中将へ昇進し、翌37年（昭和12年）に関東軍参謀長となり、1938年（昭和13）年5月には、ついに板垣征四郎陸軍大臣の下で陸軍次官を務めることになる。ここで彼は持ち前の能吏ぶりを発揮し、先に紹介した「カミソリ東条」とのあだ名を命名されて衆目を集める存在となるのである。さらに、同年12月には航空総監および航空本部長となり、1940年（昭和15年）4月に国家政策への貢献を表されて旭日大綬章を受賞する。

(2) 帝国宰相としての東条

さて、1940年（昭和15年）から、東条首相は本格的かつ急速に政治家への道を歩み始めることになる。まず、同年7月～1941年（昭和16年）10月まで4年間、第2次近衛文麿内閣の陸軍大臣となり、その後、第3次内閣にも留任する。この任期中に、東条首相は日米交渉に関する陸軍の強硬論を代表する人物となり、中国からの撤兵に反対して内閣を倒した。戦前の日本では、閣僚内の意見

の統一がはかれない場合には、その責任を取って内閣が総辞職する慣例になっていたからである。そして、1941年（昭和16年）10月に大将へ昇進し、同年10月～1944年（昭和19年）７月にはついに首相へ就任し、さらに、陸軍大臣と内務大臣を兼任し、対米英開戦の最高責任者となるのである。

東条内閣は、いわゆる初期の作戦の成功によって、その独裁体制を強めていった。特に、1942年には候補者推薦制度による翼賛選挙を実現し、国内の戦争体制の強化が行なわれた。しかし、いかに自己へ権力を集中させようとも、やはり陸軍と海軍との軍部内における対立関係や軍隊を管理する統帥権と国務を管理する政治権の分裂を解消することはできなかった。なお、東条首相の権力集中はその後も続き、1942年（昭和17年）９月には外務大臣を兼任し、また、1943年（昭和18年）４月には文部大臣を兼任、さらに同年10月には商工大臣も兼任し、同年11月に商工省を廃止して新たに軍需省を設置した後、軍需大臣をも兼任していく。そして、マーシャル群島失陥後の1944年（昭和19年）２月には、ついにみずから参謀総長をも兼任し、ここに日本の憲政史上空前の政治的権力を一手に集中させることになった。それでもなお、戦局の劣勢を食い止めることはできず、陸軍を中心とした重臣内部での批判も強くなり、サイパン島陥落の直後の44年７月に、その責任を取って総辞職することになった。実際、太平洋戦争全般を通じて、日本の陸海軍はそれぞれの戦闘においてはアメリカ軍に対して相当なる打撃を与えているのである。しかし、アメリカには、その戦闘で失った損失を補給できる物量の力があったのに対して、日本には、自己の損失を補給する物量の力がなかった。結果は、戦争が長引けば長引くほど、少しずつ戦力の彼我が劣勢となっていくという単純な足し算と引き算の問題であった。そして、1945年８月、日本は鈴木貫太郎内閣の下で遂行された天皇陛下の「ご聖断」に基づき、ポツダム宣言を受諾して連合国に無条件降伏した。

敗戦後、東条は、占領軍の逮捕を恐れてヒトラーやムッソリーニと同じくピストル自殺を図っている。それには、普段、護身用に身につけていたブローニング社製の小型拳銃ではなく、コルト社製の32口径のピストルを使用した。しかし、未遂に終わっている。一方で、文民統制の最後の砦として、天皇や元老・西園寺公望、そして、良識派の国民の期待に答えることが出来ず、軍人政権に後事をゆだねることになってしまった近衛文麿首相は、自宅で青酸カリを飲んで自殺している。生き残った東条首相は、1946年（昭和21年）の５月３日から1948年（昭和23年）11月12日まで開催された極東国際軍事裁判（いわゆる東京裁判）でＡ級戦犯に指名され、戦争責任（いわゆる戦争を起こした罪）を問われつつ、1948年（昭和23年）11月12日に死刑判決を受け、12月23日には巣鴨プリズン内で絞首刑となった。血気盛んな「カミソリ東条」は、この時、すでに64歳になっていた。非道なことに、占領軍の決定により、遺骨は家族に渡されなかった。辞世の句は「我ゆくも、またこの土地に帰り来ん」と記録されている。誰よりも事務作業に堪能で、決断力にも富んだ典型的な軍人官僚であり、歴代の首相中、最も天皇に忠実であったといわれる有能な宰相は、最後は国家を戦争へ導いた犯罪者として土に帰ったのである。後には、終始、彼を精神的に支え続けた内助の功の誉れ高きかつ子夫人と、彼がこよなく愛した３男４女が残された。

3．おわりに――軍人政治家たちの評価

(1) 鈴木貫太郎の評価

鈴木貫太郎は、単なる勇敢で有能な軍人であるだけではなく、日本が生んだ当代随一の政治家でもあった。それは、同時代のシャルル・ド・ゴールにも比肩し得る器量であったといえる。鈴木首相の人生は、ある意味では軍人としての順風満帆の人生として推移してきた。このあたりは、前出のド・ゴール大統領とは異なる。職業軍人としてのド・ゴールの人生は、お世辞にも順調とは言い難い。これに反して、鈴木首相は、その基本的なキャラクターとして、軍隊という最高度に整備された組織の中で、着実にその出世街道を登っていける行政官僚タイプの資質を有していたと考えられる。その証拠に、鈴木首相は、大佐のまま据え置かれ、レイノー内閣への陸軍次官としての入閣に際し、軍の対面を気にした上司たちからやっと準将へと昇進させてもらったド・ゴールとは異なり、しっかりと自身の仕事をこなしつつ、海軍大将、連合艦隊司令長官の地位にまで到達し、軍人としての位階人身を極めている。

しかし、鈴木首相は、その人生の最後の局面において、祖国の敗戦という自らが予想だにしなかった非常事態に直面したことは、ド・ゴールと共有するショッキングな経験であった。そこで、鈴木首相は、その「老獪（ろうかい）」とまでいわれた卓越した政治手腕をもって、まず、閣僚の人事政策に卓越した力量を発揮した。すなわち、自分の出身母体である海軍からは、日米開戦に最後まで反対した終戦推進派の米内光政を海軍大臣に、外務大臣として、これもやはり外務省キャリアの中で最も終戦推進派として目されていた東郷茂徳を抜擢し、最も強硬な反対が予想される陸軍からは、侍従長時代に知故のあった阿南惟幾大将を陸軍大臣として起用し、終戦工作のための布石としている。そして、本人はいたって真面目で実直な人物イメージを装いながら、海軍や官僚など、子飼いの勢力の地盤を固め、陸軍や世論を刺激しない国体護持宣言などを行ない、一歩一歩着実に段階を経て、その政治的役割を果たしたといえる。そして、広島、長崎における新型爆弾（原子爆弾）の被爆によって陸軍や世論がたじろいだ好機を逃すことなく、一気に終戦工作を展開したのである。

彼の首相としてのこうした一連の政治過程は、今日においてもなお、「外交は内政」という格言とともに、政治学や国際関係論の重要な研究対象となっている。そして、その際にも、自身の行政家としてのいわば「管理的リーダー」としてのキャラクターの限界を悟り、それに不足するいわば「象徴的リーダーシップ」の部分を昭和天皇に発揮していただくことを通じて、祖国の平和を回復した。ここに、数多の軍人政治家たちが、軍人としての域を超えて政治家として脱皮することができないままに終わってしまったのに対して、鈴木首相は見事に単なる軍人から政治家へと脱皮し、歴史における自身の役割を立派に果たした姿を見ることができる。もし、東条英機首相に、鈴木首相のような官僚としての能力を超えた政治家としての能力やセンスが少しでも備わっていたならば、日米開戦自体は避けられなかったにせよ、この戦争の帰趨はもう少し異なるものになっていたかも知れない。

(2) 東条英機の評価

一方の東条首相も、鈴木貫太郎と同様に真面目で誠実な日本男児であった。また、彼は誰よりも実直で優秀な行政官僚であり、誰よりも祖国に忠実で勇敢な軍人であった。しかし、彼はあくまでも軍人であり、官僚であった。そして、遂に政治家とは成り得なかった。というよりも、彼は当時の陸軍の中でもとりわけ官僚的な資質を持つ軍人であった。彼の能吏ぶりは同僚たちにも有名であったが、それは行政的分野、すなわち、事務レベルの作業において発揮されたものであった。事務レベルの有能さというものは、あらかじめ決められた枠組の中での作業を遂行する際には格別の効果を発揮する種類の能力である。しかし、ひとたび国家を運営する場合には、あらかじめ決められた枠組自体を変革する必要が生ずる場合が多々ある。このような場合には、事務レベルの能力を超えた政治レベルの能力が必要なのである。残念ながら、東条首相の能力は、前者の種類のそれであった。

その点で、残念ながら彼の器量は、同時代のシャルル・ド・ゴールや鈴木貫太郎には及ばない。ド・ゴールや鈴木は、自らの本来の職分である軍人という狭い枠組を超えて、政治家として祖国の危機に対応した。一方は敗戦国として、また他方は戦勝国としての彼我の違いはあれども、彼らはまぎれもなくその危機を「政治的手腕」によって収拾した政治家であった。もし、東条首相に政治家としての技量がそなわっていたら、あるいは、彼自身が少しでも軍人としての自意識を超えて政治家たらんと欲していたならば、日米開戦自体は避けられなかったにせよ、少なくとも後年の鈴木貫太郎が行なったように、天皇の「ご聖断」を仰ぐという「政略」をもって、戦局が有利なうちにアメリカとの和平交渉を画策することが出来たかも知れない。そして、そのために、アメリカ通の山本五十六元帥（当時、大将）を海軍大臣に抜擢するなり、融和派のキャリアとして知られる東郷茂徳を外務大臣に起用するなり出来たかも知れない。いずれにしろ当時の東条首相には、それを可能にでき得るほどの政治的な権限が付与されていたのである。

しかし、東条首相は、徹頭徹尾、その死に至るまで、あくまでも軍人・官僚としての職分を全うした。軍隊とは、国家の組織の中でも最高度に整備された官庁のことである。したがって、職業軍人とは、すなわち、その官庁組織のキャリア官僚なのである。キャリア官僚には行政の技術はあっても、政治家としての技量はない。それが、政治家・東条英機の限界であった。

しかし、東条首相は、自己に与えられた歴史的かつ悲劇的な役割から逃げるような卑怯者ではなかった。自己の持ち得る技術の精一杯を駆使して、その役割の遂行に身命を賭した勇者であった。そして、祖国の敗戦という矛盾を一身に背負い、死をもって公僕であるキャリア官僚としての責任をきちんと果たした人物であった。その強い責任感は、現代日本のキャリア官僚や政治家たちにも見習って欲しい気概がある。

彼がＧＨＱの追求を恐れて自殺を図って失敗したという記録は、半分は事実であり、半分は正確ではないと思われる。おそらく東条首相は、自身が生涯をかけて忠節を尽くした天皇陛下に戦争犯罪の罪がないことを訴えられるのは、当時の日本では自分以外にいないことを分かっていたのであろう。そこで彼は、果たして「生きて虜囚の辱めを受けるなかれ」の軍人勅諭そのままに自決する

か、もしくは、敢えて生きて陛下の罪なきところを世界に訴えるべきか、そのいずれを選択するべきなのかを心底から悩んでいたに違いない。その迷いが彼の自殺を失敗させたと見る方が、もっと素直な見方のように思われる。

言うまでもなく、日米開戦や敗戦の責任を東条首相一人に着せるのは相当なる誤解であり、また、あまりにも気の毒である。むしろ彼は、当時の日本の政治家たちがやった失策の後始末を請け負った悲劇の人であったともいえる。彼の歴史的な評価が今もって定説として定まらない現状に触れる時、彼が背負ったこうした悲劇的な歴史上の役割と、それを逃げずに正面から正々堂々と請け負った気概を想起するにおよび、筆者はどうしても彼の悲運に同情する感情を抑えることができず、どうかその霊よ安かれと心から念じざるを得ない。その意味で東条首相は、まぎれもなく大日本帝国が生んだ偉大な軍人であり、また同時に、責任感のある尊敬されるべき公僕の一人であったといえよう。

注　釈

(1) **鈴木貫太郎**（Suzuki, Kantaro）（1868年～1948年）大日本帝国海軍大将・枢密院議長・首相。**東条英機**（Tohjyo, Hideki）（1884年～1948年）大日本帝国陸軍大将・陸相・軍需相・参謀総長・首相。

(2) 現代の日本人における知名度の低さに比べて、鈴木首相の伝記は意外に多い。代表的なものは、まず政治学者の文献として、花井等『終戦宰相・鈴木貫太郎』（広池出版、1997年）、猪木正道『軍国日本の興亡』（中公新書、1995年）などがあり、また、作家の著作として、半藤一利『聖断・天皇と鈴木貫太郎』（文春文庫、1998年）、半藤一利『日本のいちばん長い日』（文春文庫、1995年）、小堀桂一郎『宰相・鈴木貫太郎』（文春文庫、1987年）、小松茂朗『終戦時宰相・鈴木貫太郎』（光人社、1995年）、立石優『鈴木貫太郎』（PHP文庫、2000年）などがある。なお、鈴木首相の長男である鈴木一氏の編集による自伝として、鈴木貫太郎（鈴木一編）『鈴木貫太郎自伝』（時事通信社、1985年）も刊行されている。

(3) 鈴木内閣の陸相を務め、本人自身の主張とは異なり、はからずも徹底抗戦派の代表となってすべての矛盾を背負いつつ自決した阿南大将については、角田房子『一死、大罪を謝す・陸軍大臣阿南惟幾』（新潮社、1983年）などを見よ。

(4) 昨今を通じて、わが国における東条首相の評価は決して低くないものがあり、彼を歴史上の政治家として正当に評価している文献は多く、逆に、不当に低く評価している文献は意外にもほとんど見当たらない。たとえば、いささか古い文献ではあるが、いわゆる「定番本」として、上法快男『東条英機』（芙蓉書房出版、1974年）、矢次一夫『東条英機とその時代』（碧天社舎、1984年）などを見よ。また、最近の文献としては、亀井宏『東条英機（上・下）（光人社NF文庫）』（光人社、1998年）、松田十刻『東条英機・大日本帝国に殉じた男（PHP文庫）』（PHP研究所、2002年）などを参照せよ。

(5) 東条首相の人格や志が高潔なものであり、その才能が非凡であったことは、彼の家族や子孫が伝える文献からも明らかである。たとえば、佐藤早苗『東条英機「わが無念」（河出文庫）』（河出書房新社、1997年）、佐藤早苗『東条英機・封印された真実』（講談社、1997年）、東条由布子『祖父東条英機「一切語るなかれ」（増補改訂版）（文春文庫）』（文藝春秋社、2000年）、平野素邦『戦争責任我に在り・東条英機夫人メモの真実』（光文社、1995年）などを見よ。